

源氏物語

絵合

紫式部

青空文庫

あひがたきいつきのみことおもひてき

さらに遥はるかになりゆくものを（晶子）

前齋宮ぜんさいぐうの入内じゆだいを女院は熱心に促しておいでになつた。こまごまとした入用の品々もあろうがすべてを引き受けてする人物がついていないことは気の毒であると、源氏は思いながらも院への御遠慮があつて、今度は二条の院へお移しすることも中止して、傍觀者らしく見せてはいたが、大体のことは皆源氏が親らしくしてする指図さしずで運んでいった。院は残念がつておいでになつたが、負けた人は沈黙すべきであると思召おほしめして、手紙をお送りになる

ことも絶えた形であつた。しかも当日になつて院からのたいした
お贈り物が来た。御衣服、櫛くしの箱、乱れ箱、香壺かうごの箱には幾種類
かの薰くんこう香こうがそろえられてあつた。源氏が拝見することを予想し
て用意あそばされた物らしい。源氏の来ていた時であつたから、
女別当によべつとうはその報告をして品々を見せた。源氏はただ櫛の箱だけ
を丁寧ていねいに拝見した。繊細な技巧でできた結構な品である。挿さし櫛
のはいつた小箱につけられた飾りの造花に御歌が書かれてあつた。

別れ路ぢに添へし小櫛をかごとにてはるけき中と神やいさめし

この御歌に源氏は心の痛くなるのを覚えた。もつたいないこと

を計らったものであると、源氏は自身のかつてした苦しい思いに引き比べて院の今のお心持ちも想像することができてお気の毒でならない。齋王として伊勢へおいでになる時に始まった恋が、幾年かの後に神聖な職務を終えて女によおう王が帰京され御希望の実現されてよい時になって、弟君の陛下の後こうきゆう宮へその人がはいられるということではどんな気があそばすだろう。閑暇かんかな地位へお退きのになった現今の院は、何事もなしうる主権に離れた寂しさというようなものをお感じにならないであろうか、自分であれば世の中が恨めしくなるに違いないなどと思うと心が苦しくて、何故女王を宮中へ入れるようなよけいなことを自分は考えついて御みこころ心を悩ます結果を作ったのであろう、お恨めしく思われた時代もあつ

たが、もともと優しい人情深い方であるのにと、源氏は歎息たんそくをしながらしばらく考え込んでいた。

「この御返歌はどうなさるだろう、またお手紙もあつたでしょうがお答えにならないではいけないでしょう」

などと源氏は言つてもいたが、女房たちはお手紙だけは源氏に見せることをしなかつた。宮は気分がおすぐれにならないで、御返歌をしようとされないので、

「それではあまりに失礼で、もつたいないことでございます」

こんなことを言つて、女房たちが返事をお書かせしようと苦心している様子を知ると、源氏は、

「むろんお返事をなさらないではいけません。ちよつとだけでよ

いのですからお書きなさい」

と言った。源氏にそう言われることが齋宮にはまたお恥ずかしくてならないのであつた。昔を思い出して御覧になると、艶えんに美しい帝みかどが別れを惜しんでお泣きになるのを、少女心おとめごころにおいたわしくお思いになつたことも目の前に浮かんできた。同時に、母君のことも思われてお悲しいのであつた。

別るとてはるかに言ひしひとこと言もかへりて物は今ぞ悲しき

とだけお書きになつたようである。お使いの幾人かはそれぞれ差のあるいただき物をして帰つた。源氏は齋宮の御返歌を知りた

かつたのであるが、それも見たいとは言えなかつた。院は美男でいらせられるし、女王もそれにふさわしい配偶のように思われる、少年でいらせられる帝の女御（にようご）におさせすることは、女王の心に不満足なことであるかもしれないなどと思いやりのありすぎることまでも考えてみると、源氏は胸が騒いでならなかつたが、今日になつて中止のできることもなかつたから儀式その他についての注意を言い置いて、親しい修理大夫（しゆりだゆうさんぎ）参議である人にすべてを委託して源氏は六条邸を出て御所へ参つた。養父として一切を源氏が世話していることにしては院へ濟まないという遠慮から、単に好意のある態度を取つていふふうを示していた。もとからよい女房の多い宮であつたから、実家に引いていがかちだつた人たち

も皆出て来て、すではなやかな女御の形態が調ったように見え
た。御息所みやすどころが生きていたならば、どんなにこうしたことをよろ
こぶことであろう、聡明そうめいな後見役として女御の母であるのに最
も適した性格であつたと源氏は故人が思い出されて、恋人として
ばかりでなく、あの人を失つたことはこの世の損失であるとも源
氏は思つた。洗練された高い趣味の人といつても、あれほどにす
ぐれた人は見いだせないのであると、源氏は物のおりごとに御息
所を思つた。

このごろは女院も御所に来ておいでになつた。帝は新しい女御
の参ることをお聞きになつて、少年らしく興奮しておいになつ
た。御年齢よりはずっと大人びた方なのである。女院も、

「りつぱな方が女御に上がって来られるのですから、お氣をおつけになつてお逢いなさい」

と御注意をあそばした。帝は人知れず大人の女御は恥ずかしいであろうと思召されたが、深更になつてから上の御局みつぼねへ上がつて来た女御は、おとなしいおおような、そして小柄な若々しい人であつたから自然に愛をお感じになつた。弘徽殿こきでんの女御は早くからおそばに上がつていたからその人を睦まじい者に思召され、この新女御しんによごは品よく柔らかい魅力があるとともに、源氏が大きな背景を作つて、きわめて大事に取り扱ふ点で侮りがたい人に思召されて宿直とのいに召される数は正しく半々になつていたが、少年らしくお遊びになる相手には弘徽殿がよくて、昼などおいでになるこ

とは弘徽殿のほうが多かつた。権中納言は后にも立てたい心で後宮に入れた娘に、競争者のできたことで不安を感じていた。

院は櫛くしの箱の返歌を御覧になってからいつそう恋しく思召された。ちようどそのころに源氏は院へ伺候した。親しくお話を申し上げているうちに、齋宮が下向されたことから、院の御代みよの齋宮の出発の儀式にお話が行った。院も回想していろいろとお語りになったが、ぜひその人を得たく思っていたとはお言いにならないのである。源氏はその問題を全然知らぬ顔もしながら、どう思召していられるかが知りたくて、話をその方向へ向けた時、院の御表情に失恋の深い御苦痛が現われてきたのをお気の毒に思った。美しい人としてそれほど院が忘れがたく思召す前齋宮は、どんな

美^び貌^{ぼう}をお持ちになるのであろうと源氏は思つて、おりがあればお顔を見たいと思つているが、その機会の与えられないことを口^{くち}惜^おしがつていた。貴女らしい奥深さをあくまで持つていて、うかとして人に見られる隙^{すき}のあるような人でない齋宮の女御を源氏は一^す面^きでは敬意の払われる養女であると思つて満足しているのであつた。

こんなふう^{すきま}に隙間もないふう^{すきま}に二人の女御が侍しているのであつたから、兵部^{ひょうぶ}卿^{きやう}の宮は女王の後宮入りを実現させにくくて煩^{はん}悶^{もん}をしておいでになつたが、帝が青年におなりになつたなら、外戚の自分の娘を疎外あそばすことはなかりうとなお希望をつないでおいでになつた。宮廷の二人の女御ははなやかに挑^{いど}み合つた。

帝は何よりも絵に興味を持っておいでになった。特別にお好きな
せいかお描きかになることもお上手じょうずであつた。齋宮の女御は絵を
よく描くのでそれがお気に入つて、女御の御殿へおいでになつて
はごいっしよに絵をお描きになることを楽しみにあそばした。殿
上の若い役人の中でも絵の描ける者を特にお愛しになる帝であつ
たから、まして美しい人が、雅味がみのある絵を上手に墨で描いて、
からだを横たえながら、次の筆の下ろしようを考えたりしている
可憐かれんさが御心みこころに沁しんで、しばしばこちらへおいでになるよう
なり、御寵ちようあい愛あいが見る見る盛んになつた。権中納言がそれを聞
くと、どこまでも負けぎらいな性質から有名な画家の幾人を家
にかかえて、よい絵をよい紙に、描かせることをひそかにさせてい

た。

「小説を題にして描いた絵が最もおもしろい」

と言つて、権中納言は選んだよい小説の内容を絵にさせているのである。一年十二季の絵も平凡でない文学的価値のある詞書きことばをつけて帝のお目にかけて。おもしろい物であるがそれは非常に大事な物らしくして、帝のおいになつての間にも、長くは御前へ出して置かずにしまわせてしまうのである。帝が齋宮の女御に見せたく思召して、お持ちになろうとするのを弘徽殿の人々は常にはばむのであつた。源氏がそれを聞いて、

「中納言の競争心はいつまでも若々しく燃えているらしい」
などと笑つた。

「隠そう隠そうとしてあまり御前へ出さずに陛下をお悩ましするなどということはけしからんことだ」

と源氏は言つて、帝へは

「私の所にも古い絵はたくさんございますから差し上げることにいたしましょう」

と奏して、源氏は二条の院の古画新画のはいつた棚たなをあけて夫人といつしよに絵を見分けた。古い絵に属する物と現代的な物とを分類したのである。長恨歌、王昭君などを題目にしたのはおもしろいが縁起はよろしくない。そんなのを今度は省くことに源氏は決めたのである。旅中に日記代わりに描いた絵巻のはいつた箱を出して来て源氏ははじめて夫人にも見せた。何の予備知識を備

えずに見る者があつても、少し感情の豊かな者であれば泣かずに
はいられないだけの力を持った絵であつた。まして忘れようもな
くその悲しかった時代を思っている源氏にとつて、夫人にとつて
今また旧作がどれほどの感動を与えるものであるかは想像するに
かたくはない。夫人は今まで源氏の見せなかつたことを恨んで言
つた。

「一人居あて眺ながめしよりは海人あまの住むかたを書きてぞ見るべかり
ける

あなたにはこんな慰めが
おありになつたのですわね」

源氏は夫人の心持ちを哀れに思つて言った。

「うきめ見しそのをりよりは今日はまた過ぎにし方に帰る涙か

中ちゆうぐう宮みやにだけはお目にかけてねばならない物ですよ」

源氏はその中のことにできのよいものでしかも須磨すまと明石あかしの特色のよく出ている物を一帖じょうずつ選んでいながらも、明石の家の描かかれてある絵にも、どうしてあるであろうと、恋しさが誘われた。源氏が絵を集めていると聞いて、権中納言はいつそう自家で傑作をこしらえることに努力した。巻物の軸ひも、紐ひもの装幀そうていにも意匠を凝らしているのである。それは三月の十日ごろのことであつたか

ら、最もうらかな好季節で、人の心ものびのびとしておもしろくばかり物が見られる時であつたし、宮廷でも定まつた行事の何もない時で、絵画や文学の傑作をいかにして集めようかと苦心をするばかりが仕事になつていた。これを皆陛下へ差し上げることにして公然の席で勝負を決めるほうが興味のあつてよいことであると源氏がまず言い出した。双方から出すのであるから宮中へ集まつた絵巻の数は多かつた。小説を絵にした物は、見る人がすでに心に作つてゐる幻想をそれに加えてみることによつて絵の効果が倍加されるものであるからその種類の物が多い。梅壺うめつぼの王おうに女御じよごのほうのは古典的な価値の定まつた物を絵にしたのが多く、弘徽殿のは新作として近ごろの世間に評判のよい物を描かせたの

が多かつたから、見た目のにぎやかで派手はでなのはこちらにあつた。
ないしのすけ典侍ないしや内侍みようぶや命婦も絵の価値を論じることに一所懸命になつていた。女院も宮中においでになるころであつたから、女官たちの論議する者を二つにして説をたたかわせて御覧ごらんになつた。左へいてんじ右に分けられたのである。梅壺方だいには左で、平典侍へいてんじ、侍従の内侍、少将の命婦などで、右方ひようえは大弐だいにの典侍、中将の命婦、兵衛の命婦などであつた。皆世間から有識者として認められている女性である。思い思いのことを主張する弁論を女院は興味深く思おぼしめ召して、まず日本最初の小説である竹取の翁おきなと空穂うつほの俊とし蔭かげの巻を左右にして論評をお聞きになつた。

「竹取の老人と同じように古くなつた小説ではあつても、思おもひ上

がった主人公の赫耶姫かぐやの性格に人間の理想の最高のものが暗示されていてよいのです。卑近なことばかりがおもしろい人にはわからないでしょうが」

と左は言う。右は、

「赫耶姫の上った天上の世界というものは空想の所産にすぎません。この世の生活の写してある所はあまりに非貴族的で美しいものではありません。宮廷の描写などは少しもありませんか。赫耶姫は竹取の翁の一つの家を照らすだけの光しかなかったようですね。安部あべの多おほしが大金で買った毛皮がめらめらと焼けたと書いてあったり、あれだけ蓬菜ほうらいの島を想像して言える倉持くらもちの皇子みこが贗物にせものを持って来てごまかそうとしたりするところがとて

もいやです」

この竹取の絵は巨勢こせの相覧おうみの筆で、詞書ことばきは貫之つらゆきがしている。
紙屋紙かみやがみに唐錦からにしきの縁が付けられてあつて、赤紫の表紙、紫檀したん
の軸で穩健な体裁である。

「俊蔭は暴風と波もてあそに弄もてあそばれて異境を漂泊しても芸術を求める心が強くて、しまいには外国にも日本にもない音楽者になつたという筋が竹取物語よりずっとすぐれております。それに絵も日本と外国との対照がおもしろく扱われている点ですぐれております」

と右方は主張するのであつた。これは式紙地しきしじの紙に書かれ、青い表紙と黄玉おうぎよくの軸が付けられてあつた。絵は常則つねのり、字は道風であつたから派手はでな気分はでに満ちている。左はその点が不足であ

つた。次は伊勢物語と正三位しょうざんみが合わされた。この論争しげきも一通りでは済まない。今度も右は見た目がおもしろくて刺戟しげき的で宮中の模様も描かれてあるし、現代に縁の多い場所や人が写されてある点でよさそうには見えた。平典侍が言った。

「伊勢の海の深き心をたどらずふて古りにし跡と波や消つべき

ただの恋愛談を技巧つづだけで綴つづつてあるような小説に業平朝臣なりひらあそんを負けさせてなるものですか」

右の典侍が言う。

雲の上に思ひのぼれる心には千尋ちひろの底もはるかにぞ見る

女院が左の肩をお持ちになるお言葉を下された。

「兵衛王ひょうえおうの精神はりっぱだけれど在五中将以上のものではない。

見るめこそうらぶれぬらめ年経にし伊勢をの海人あまの名をや沈
めん」

婦人たちの言論は長くかかって、一回分の勝負が容易につかないで時間がたち、若い女房たちが興味をそれに集めている陛下と梅壺うめつぼの女御の御絵はいつ席上に現われるか予想ができないので

あつた。源氏も参内して、双方から述べられる支持と批難の言葉をおもしろく聞いた。

「これは御前で最後の勝負を決めましょう」

と源氏が言つて、絵合わせはいつそう広く判者を求めることになつた。こんなこともかねて思われたことであつたから、須磨、明石の二巻を左の絵の中へ源氏は混ぜておいたのである。中納言も劣らず絵合わせの日に傑作を出そうとすることに没頭していた。世の中はもうよい絵を製作することと、捜し出すことのほかに仕事がないように見えた。

「今になつて新しく作ることは意味のないことだ。持っている絵の中で優劣を決めなければ」

と源氏は言っているが、中納言は人にも知らせず自邸の中で新画を多く作らせていた。院もこの勝負のことをお聞きになつて、梅壺へ多くの絵を御寄贈あそばされた。宮中で一年じゆうにある儀式の中のおもしろいのを昔の名家が描いて、延喜えんぎの帝が御自身で説明をお添えになつた古い巻き物のほかに、御自身の御代みよの宮廷にあつたはなやかな儀式などをお描かせになつた絵巻には、齋さいいぐう宮発足の日の大極殿だいくくでんの別れの御櫛みぐしの式は、御心みこころに沁しんで思召されたことなのであつたから、特に構図なども公茂きんもち画伯がはくに詳しくお指図さしずをあそばして製作された非常にりっぱな絵もあつた。沈じんの木のの透かし彫りの箱に入れて、同じ木で作つた上飾りを付けた新味のある御贈り物であつた。御挨拶あいさつはただお言葉だけで院

の御所への勤務もする左近の中將がお使いをしたのである。大極殿の御輿みこしの寄せてある神々しい所に御歌があつた。

身こそかくしめの外ほかなれそのかみの心のうちを忘れしもせず

と云うのである。返事を差し上げないこともおそれおおいことであると思われて、齋宮の女御は苦しく思いながら、昔のその日の儀式に用いられた簪かんざしの端を少し折つて、それに書いた。

しめのうちは昔にあらぬこちして神代のことも今ぞ恋しき

藍色あゐの唐紙からしに包んでお上げしたのであった。院はこれを限りもなく身に沁しんで御覧みくらになつた。このことで御位みくらも取り返したく思召した。源氏をも恨めしく思召されたに違ちがひない。かつて源氏に不合理な嚴罰をお加えになつた報いをお受けになつたのかもしれない。院のお絵は太後の手を経て弘徽殿こうきでんの女御にょぎのほうへも多く来ているはずである。尚な侍しのかみも絵の趣味を多く持つている人であつたから、姪めいの女御のためいろいろと名画を集めていた。

定められた絵合わせの日になると、それはいくぶんにわかなくとではあつたが、おもしろく意匠をした風流な包みになつて、左右の絵が会場へ持ち出された。女官たちの控え座敷に臨時の玉座が作られて、北側、南側と分かれて判者が座についた。それは清せ

いりようでん

涼殿のことで、西の後涼殿の縁には殿上役人が左右に思

いの味方をしてすわつていた。左の紫檀したんの箱に蘇枋すおうの木の飾り台、

敷き物は紫地の唐錦からにしき、帛紗ふくさは赤紫の唐錦である。六人の侍童

の姿は朱色の服の上に桜襲さくらがさねの汗衫かざみ、柏あこめは紅の裏に藤襲ふじがさねの

厚織物で、からだのとりながきわめて優美である。右は沈の木

の箱に浅香せんこうの下机したづくえ、帛紗は青地の高麗錦こうらいにしき、机あしの脚の組

み紐ひもの飾りがはなやかであった。侍童らは青色に柳の色の汗衫かざみ、

山吹襲やまぶきかさねの柏あこめを着ていた。双方の侍童がこの絵の箱を御前に据す

えたのである。源氏の内大臣と権中納言とが御前へ出た。太宰ださいの

帥そつの宮も召されて出ておいでになった。この方は芸術に興味を

お持ちになる方であるが、ことに絵画がお好きであったから、初

めに源氏からこのお話もしてあった。公式のお召しではなくて、殿上の間に来ておいでになったのに仰せが下ったのである。この方に今日の審判役を下命された。評判どおりに入念に描かかれた絵巻が多かった。優劣をにわかにお決めになるのは困難なようである。例の四季を描いた絵も、大家がよい題材を選んで筆力も雄健に描き流した物は価値が高いように見えるが、今度は皆紙絵であるから、山水画の豊かに描かれた大作などとは違って、凡庸な者に思われている今の若い絵師も昔の名画に近い物を作ることができ、それにはまた現代人の心を惹ひくものも多量に含まれていて、左右はそうした絵の優劣を論じ合っているが、今日の論争は双方ともまじめであったからおもしろかった。襖からかみ子をあけて朝あさがれ

餉いの間に女院は出ておいでになつた。絵の鑑識まに必ず自信がおありになるのであらうと思つて、源氏はそれさえありがたく思われた。判者が断定のしきれないような時に、お伺いを女院へするのに対して、短いお言葉の下されるのも感じのよいことであつた。左右の勝ちがまだ決まらずに夜が来た。最後の番に左から須磨の巻が出てきたことによつて中納言の胸は騒ぎ出した。右もことに最後によい絵巻が用意されていたのであるが、源氏のような天才が清澄な心境に達した時に写生した風景画は何者の追随をも許さない。判者の親王をはじめとしてだれも皆涙を流して見た。その時代に同情しながら想像した須磨よりも、絵によつて教えられる浦住まいはもつと悲しいものであつた。作者の感情が豊かに現わ

れていて、現在をもその時代に引きもどす力があつた。須磨からする海のながめ、寂しい住居すまい、崎々浦々が皆あざやかに描かれてあつた。草書で仮名混じりの文体の日記がその所々には混ぜられてある。身にしむ歌もあつた。だれも他の絵のことは忘れて惚こうことなつてしまつた。圧巻はこれであると決まつて左が勝ちになつた。

明け方近くなつて古い回想から湿つた心持ちになつた源氏は杯を取りながら帥そつの宮に語つた。

「私は子供の時代から学問を熱心にしていましたが、詩文の方面に進む傾向があると御覧になつたのですか、院がこうおっしゃいました、文学というものは世間から重んぜられるせい、そのほ

うのことを専門的にまでやる人の長寿と幸福を二つともそろって得ている人は少ない。不足のない身分は持っているのであるから、あながちに文学で名誉を得る必要はない。その心得でやらねばならない。以来私に本格的な学問をいろいろとおさせになりましたが、できが悪い課目もなく、またすぐれた深い研究のできたこともありませんでした。絵を描くことだけは、それは大きいことではありませんが、満足のできるほど精神を集中させて描いて見たいという希望がおりおり起こつたものですが、思いがけなく放浪者になりました時に、はじめて大自然の美しさにも接する機会を得まして、描くべき物は十分に与えられたのですが、技巧がまずくて、思いどおりの物を紙上に表現することはできませんで

した。そんなものですからこれだけをお目にかけることは恥ずかしくていたされませんから、今度のようない機会に持ち出しただけなのですが、私の行為が突飛とつぴなように評されないかと心配しております」

「何の芸でも頭がなくては習えません、それでもどの芸にも皆師匠があつて、導く道ができていますものですから、深さ浅さは別問題として、師匠の真似まねをして一通りにやるだけのことはだれにもまずできるでしょう。ただ字を書くことと囲碁だけは芸を熱心に習ったとも思われない者からもひよつくりりっぱな書を書く者、碁の名人が出ているものの、やはり貴族の子の中からどんな芸も出抜けてできる人が出るように思われます。院が御自身の親王、

内親王たちに皆何かの芸はお仕込みになったわけですが、その中でもあなたへは特別に御熱心に御教授あそばしましたし、熱心にもお習いになったのですから、詩文のほうはむろんごりつぱだし、そのほかでは琴きんをお弾ひきになることが第一の芸で、次は横笛、琵琶び、十三絃げんという順によくおできになる芸があると院も仰せになりました。世間もそう信じているのですが、絵などはほんのお道楽だと私も今までは思っていましたのに、あまりにお上じょうず手過ぎぎて墨絵描きの画家が恥じて死んでしまう恐れがある傑作をお見せになるのは、けしからんことかもしれませぬ」

宮はしまいには戯談じょうだんをお言いになったが酔い泣きなのか、故院のお話をされてしおれておしまいになった。二十幾日の月が

出てまだここへはさしてこないのであるが、空には清い明るさが満ちていた。書司に保管されてある楽器が召し寄せられて、中納言が和琴わごんの弾ひき手になったが、さすがに名手である人と人を驚かす芸であった。帥の宮は十三絃、源氏は琴、琵琶の役は少将の命婦に仰せつけられた。殿上役人の中の音楽の素養のある者が召されて拍子を取った。稀まれなよい合奏になった。夜が明けて桜の花も人の顔もほのかに浮き出し、小鳥のさえずりが聞こえ始めた。美しい朝ぼらけである。下賜品は女院からお出しになったが、なお親王は帝みかどからも御衣ぎよいを賜わった。この当座はだれもだれも絵合わせの日の絵の樽うわさをし合った。

「須磨、明石の二巻は女院の御座右に差し上げていたいただきたい」

こう源氏は申し出た。女院はこの二巻の前後の物も皆見たく思召すとのことであつたが、

「またおりを見まして」

と源氏は御挨拶あいさつを申した。帝が絵合わせに満足あそばした御様子であつたのを源氏はうれしく思った。二人の女御の挑いどみから始まつたちよつとした絵の上のことでも源氏は大形おおぎように力を入れて梅壺うめつぼを勝たせずには置くちおかなかつたことから中納言は娘の気押けされて行く運命も予感して口惜くちおしがつた。帝は初めに参つた女御であつて、御愛情に特別なもののあることを、女御の父の中納言だけは想像のできる点もあつて、頼もしくは思つていて、すべては自分の取り越し苦勞であるとして思おうとも中納言はして

いた。

宮中の儀式などもこの御代みよから始まったというものを起こそうと源氏は思うのであった。絵合わせなどという催しでも単なる遊戯でなく、美術の鑑賞の会にまで引き上げて行なわれるような盛りの御代が現出したわけである。しかも源氏は人生の無常を深く思つて、帝がいま少し大人におなりになるのを待つて、出家がしたいと心の底では思つていようである。昔の例を見ても、年が若くて官位の進んだ、そして世の中に卓越した人は長く幸福でいられないものである、自分は過分な地位を得ている、以前不幸な日のあつたことで、ようやくまだ今日まで運が続いているのである、今後もお順境に身を置いては長命のほうあぶなが危い、静か

に引きこもつて後世ごせのための仏勤めをして長寿を得たいと、源氏はこう思つて、郊外の土地を求めて御堂みどうを建てさせているのであつた。仏像、経巻などもそれとともに用意させつつあつた。しかし子供たちをよく教育してりっぱな人物、すぐれた女性にしてみようと、思う精神と出家のことは両立しないのであるから、どつちがほんとうの源氏の心であるかわからない。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kumi

2003年5月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

絵合

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>